

受注処理に「FAX-OCR」を導入し業務を効率化 運用性と安定性が製品選定の鍵に

取引先の負担を最小限に抑えながら、受発注プロセスをいかに効率化していくか。これは多数の取引先を持つ企業にとって、切実な課題だといえるだろう。田辺製薬ではこの課題を解決するために「FAX-OCR」を導入し、受注業務の大幅な効率化に成功した。成功の決め手は運用性が容易で安定して稼動する「FAX-OCR」パッケージを採用したこと。そしてもちろんそのベースとなるFAXサーバーの存在も見逃すことはできない。ここでは田辺製薬の事例を紹介しながら、業務効率化に貢献する「FAX-OCR」とはどうあるべきなのかを考えてみたい。



田辺製薬株式会社
営業統括部
業務部
営業情報課長
山田 康雄 氏



田辺製薬株式会社
営業統括部
業務部
西日本事務課長
岩川 富士夫 氏



田辺製薬株式会社
情報通信センター
システム開発部 システム課
今北 貴久 氏

注文FAXのデータ入力を手作業から「FAX-OCR」へと移行

「ナンバオ」や「アスパラ」などの製品で知られている田辺製薬が、2000年7月に「FAX-OCR」をベースにした受発注システムの本番稼動を開始した。

同社には医薬事業本部、ヘルスケア事業部、フードケミカル事業部、ファインケミカル事業部、アニマルヘルス事業部等があるが、今回のシステムはフードケミカル事業部とファインケミカル事業部、アニマルヘルス事業部をターゲットにしたもの。この3事業部では多いときには1日に800伝票の受注があり、受注確認や仕入れ品の確認などを含めれば2000通近くのFAXがやり取りされる。これらをほぼ自動化することで、受発注業務の大幅な効率化を実現したのだ。

田辺製薬が「FAX-OCR」導入を検討し始めたのは、1999年4月まで遡る。事業部全体の業務再構築を目指すプロジェクトが動き出し、その一環として受発注業務の効

率化への取り組みが始まったのである。

「以前の受発注業務はFAXで送られてきた手書きの受注伝票の内容を、顧客毎に担当の決まった専門のオペレーターがホスト・コンピュータに入力するというものでした」と説明するのは、田辺製薬営業統括部の岩川課長だ。

オペレーターは1万7000レコードという膨大な情報量を持つ台帳をめくりながら注文を受けた商品の価格をチェックし、特約店マスターからコンピュータ用のコードを拾いながらデータを入力していた。そのため1枚の伝票を処理するのに10分程度の時間がかかり、担当者が不在の時には処理効率がさらに悪くなるという問題があった。「受注処理を誰でも簡単にできるようにするにはどうしたらいいのか。この課題に取り組んでいたときに「FAX-OCR」の存在を知り、これならいけると判断したのです」

田辺製薬では1999年6月から「FAX-OCR」導入のためのプロジェクトを正式にスタート。各社の製品の比較検討を実施した。そして最終的に日本ファクシミリシステムの「じゅちゅう達人」の採用を決定したのである。

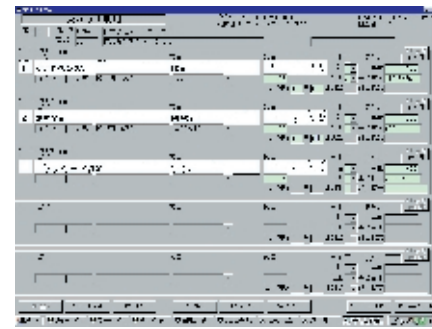
「FAX-OCR」製品採用の決め手は運用性と安定性

それではなぜ「じゅちゅう達人」を採用したのか。田辺製薬営業統括部で営業情報課長を務める山田氏は、大きくふたつのポイントがあったという。



一過性の疲労に高い効果が期待できる医薬品ミニドリンク剤「ナンバオ源流」
11月7日新発売

田辺製薬で使用している「じゅちゅう達人」の画面。画面構成も柔軟にカスタマイズすることが可能だ。



まずひとつは運用性の高さだ。「田辺製薬では以前から受発注のバックエンドとしてホスト・コンピュータを利用しており、これとの連携は欠かせません。また注文FAXのフォーマットもホスト画面に合わせたものが要求されました。「じゅちゅう達人」はこのような要求に的確に対応できたのです」

もうひとつ重要だったのが安定性だ。受発注システムはビジネスの根幹であり、ダウンすることは許されない。またトラブルが頻繁に起こるようでは業務を効率化するどころか、業務の足を引っ張ることにものりかねない。もちろん「じゅちゅう達人」がこの点でも高い評価を受けていることは言うまでもない。

今回構築されたシステムの構成は図に示す通り。一般公衆回線から来る受注FAXを受け、モデムを経由してFAXサーバーで受信。この上で「じゅちゅう達人」が動き、FAX伝票のOCR処理を行う。OCRで読み出されたデータはいったんオペレーターによってチェックされ、チェックがOKとなった時点でDBサーバーに格納。これをさらにホスト・コンピュータに転送するようになっている。

このようなオープン系システムとホストとの連携で問題になるのが、ホスト側のアプリケーションの修正だ。しかし今回のシステムでは「じゅちゅう達人」側でデータの変

田辺製薬株式会社

1678年に創業。320年余りにわたって日本を代表する製薬企業のひとつとして発展を続けており、特に循環器官系医薬品の分野では豊富な実績を有している。資本金342億5000万円、従業員数4,019名(田辺単独)、連結売上高1850億9800万円(いずれも2000年3月期)。

MPS 日本ファクシミリシステム株式会社

受注SIの分野を中心に業務パッケージの開発を目的として1985年設立。「FAX-OCR」システム、スキャナシステム等の開発・販売・保守・運用を手掛け特に「FAX-OCR」の導入事例は大手メーカーを主流に200セット以上。2000年からはWeb版じゅちゅう達人の販売を開始している。

換を行うようになっており、ホスト側は従来の端末から同じようにデータを受け取れるようになってきている。「このようにホスト側のインターフェースに合わせていただいたので、ホスト側の変更はほとんどありませんでした」というのは、田辺製薬情報通信センターシステム開発部でホストのメンテナンスを手掛けている今北氏だ。ホスト側で行ったのは、受け取ったデータの整合性をチェックするバッチ程度だったという。

FAXサーバー基盤として採用されたMultiPort FAX Pro.

実はこの「じゅちゅう達人」の運用性と安定性に大きく寄与しているのが、MultiPort FAX Pro. の存在である。「じゅちゅう達人」では、基盤となるFAXサーバー部分にMultiPort FAX Pro. が組み込まれているのだ。

日本ファクシミリシステム 代表取締役の石川氏はいう。「当社は12～3年前から「FAX-OCR」に取り組んでおり、DOS時代から提供してまいりました。そしてDOS対応版ではFAXサーバー部分も自社で手作りしていたのです」。しかし1999年にWindows NT版をリリースするにあたり、同社はこの方針を転換。他社のFAXサーバー製品を調査した上で、安定性と拡張性に優れたMultiPort FAX Pro. の採用を決定するのである。

「最初はサンプル版をお借りして使ってみたのですが、安定性の高さは抜群でしたね」というのは、日本ファクシミリシステム開発課 課長代理の米谷氏だ。「FAXは常に回線障害や通信エラーの危険にさらされていますが、MultiPort FAX Pro. はエラーが発生しても自動的に修復する機能があるため、ユーザはエラーを意識する必要がありません。これならお客様に安心して納めることができます」

MultiPort FAX Pro. を採用することで、カスタマイズも容易になったと米谷氏はいう。FAXサーバー機能がAPIとして公開されており、システム開発者が自由に使えるようになってきているからだ。特に今回のように顧客の既存システムと接続する場合には、使いやすいAPIの存在は大きなメリットだという。

わずか1週間で現れた導入効果

このように運用性、安定性に優れた「FAX-OCR」を選択することで、田辺製薬ではすぐにシステム導入効果を楽しむことが可能になった。ユーザに対する移行準備をほとんど行わなかったにも関わらず、ユーザは導入してわずか1週間でこのシステムに慣れてしまい、「慣れてしまえばこちらの方がはるかに楽」と評価されているのだ。受注作業はOCR読み取り内容のチェックだけとなり、入力作業はほぼゼロになった。これによって1枚の伝票に費やされる時間は以前の1/5程度まで短縮され、担当外の顧客からの伝票でも簡単に処理できるようになったという。

どれだけ短期間でその効果が現れるかは、新システム導入の投資効果を測る上で重要なファクターだといえる。特に近年のようにスピードが求められる時代であればなおさらだ。田辺製薬のこの事例は、システム導入効果をスピーディに得るためにはどうすべきかという問いに対するひとつの回答だといえるだろう。

(編集・制作 / 日経BP企画)

問い合わせ先

住商データコム株式会社

